論文内容の要約

学生番号	3215002
氏　　名	池内　彰子

主　査	植木　純　教授
副　査	高橋　眞理　教授
副　査	上野　恭子　教授

学位論文名	精神科看護師の批判的思考態度を促進するためのリフレクションを用いた教育プログラムの開発　　―統合失調症患者の身体症状の判断に焦点をあてて―
訳タイトル	Development of an education program based on reflection aimed at promoting psychiatric nurses' attitude toward critical thinking-Focusing on the determination of the physical symptoms of patients with schizophrenia
共著者	

論文内容の要約（1,000 字～1,500 字）

【目的】

本研究の目的は、精神科看護師が統合失調症患者の身体症状を批判的思考に基づき正確に判断するために、批判的思考態度の向上をめざした教育的な介入を試み、その効果を検証することである。

【方法】

批判的思考は看護師の臨床判断に不可欠な思考とし、その関連因子について指摘した先行研究の見解に基づき予備研究を行った。予備研究の目的は、精神科看護師の批判的思考態度に関連因子がどのように影響しているのかを自記式質問紙調査で明らかにし、教育プログラムで焦点を当てる因子を特定することであった。結果から、関連因子の中で精神科看護師の批判的思考態度に最も影響していたのは倫理的感受性であること。さらに、批判的思考態度下位概念「懐疑的態度」に着目する必要性が示唆された。

教育的介入のプログラムは、Bulman（2013）のリフレクティブサイクルを理論的な基盤とし、統合失調症患者の身体症状を判断した経験をリフレクションし、自らの統合失調症患者の捉え方の偏りに気づき、感情や思考を内省する内容とした。

介入は準実験研究（１群事前事後テスト）デザインとし、身体科臨床経験のない精神科臨床経験が５年未満の看護師 23 名を分析対象とした。評価は、介入前、介入直後と１ヶ月後に、批判的思考態度尺度・一般性自己効力感尺度（以下、GSES）等を測定するための調査を実施した。さらに、介入１か月後に教育プログラムの参加者 10 名を対象に、統合失調症患者の身体症状の判断の内容を質的に把握するための半構造化インタビューを実施した。

【結果】

介入直後、介入１ヶ月後ともに「懐疑的態度」は有意に上昇し、批判的思考の内省力の促進が示された。また、それ以外の下位概念「協同的態度」、「探求心」、「論理的思考の自信」にも同様の結果が得られた。また、介入直後、GSES 下位概念「行動の積極性」は有意に上昇し、物事に対する能動的な変化がみられた。このことは、半構造化インタビューの結果、カテゴリー【身体症状の判断に対する姿勢の変化】【患者を捉えようとする姿勢の変化】が形成されたことで裏づけられたが、「行動の積極性」は介入１ヶ月後に再び低減し、積極性が持続されにくいことが示唆された。

【考察】

精神科看護師の批判的思考態度の特徴は下位概念「懐疑的態度」に示された。「懐疑的態度」とは、物事に対し偏った見方をしていないか自分に問いかける内省的な態度のことである（常盤ら,2010）。予備研究結果から、「懐疑的態度」は精神科臨床経験だけでは促進されにくいことが示された。その理由として、慣習化された精神科病棟での業務の仕組み、および自分から体調の変化を訴えにくいという精神疾患患者の特徴から、精神科看護師による患者のとらえ方はある一定のものに偏り固定化する傾向になる。そのことが懐疑的な心のもち方を妨げる一因になると推察した。

介入結果から批判的思考態度の促進が確認できたため、教育の手法にリフレクションを用いたことは有効であった。その要因として、リフレクションのプロセスに倫理的な観点からの分析のプロセスを加えたことが挙げられる。このように、自己を振り返り、倫理的な感性を触発するプロセスは、批判的思考の客観性や内省力を強化するプロセスとして有効であった。

【結論】

本研究で開発されたリフレクションを用いた教育プログラムで精神科看護師に介入した結果、懐疑的に思考する能力の促進が認められ、批判的思考態度の促進に一定の効果が認められた。しかし、物事に対する能動的な変化の継続性は確認できなかった。今後の課題として、教育プログラムによる継続的な介入の必要性が示唆された。